令和3年度事業報告

特定非営利活動法人　親がめ

Ⅰ　法人の運営

①　会員数 令和4年3月31日現在
【正会員個人】53人／【特別会員】36団体／【賛助会員】4人

新型コロナウィルス感染症が拡大し、収束の見通しが立たない閉塞感が続きました。孤立が深まる子育ち・子育てを支えるため、新しいひろば様式の基、様々な事業を展開しました。
妊娠期から子育て期の親たちを、身近な寄り添い型支援を持ってサポートし、相互の交流を図り、地域へ繋げる様々な工夫を実践しました。何より、人と人の間で育ち合う“子どもという生き物”の育ちを尊重し、年齢に応じた遊びの環境を整え、声をかけ、マスク越しに笑いかけ、親たち、地域の人と共に育ちを見守りました。
地域の様々な場や事業が休止等を余儀なくされながらも、各すくすくかめっ子はじめネットワークで繋がる先々と連携を図り、情報を集め、ホームページでの周知、相談、必要に応じた情報提供等を行い、繋がりを育みました。
身近な地域の「場」の意義を更に確認しつつ、一方でコロナ禍だからこそ整備された、オンライン事業やオンラインによる関係各所との打ち合わせが定着しました。リアルではなくても顔が見えるツールを共有することで、コミュニケーションが深まり、すき間時間での打ち合わせを丁寧に重ねることが事業に反映されました。

●第４期目（１６年～２０年）の拠点運営を受託
・神奈川区地域子育て支援拠点事業運営法人募集プロポーザルに、提案書を提出、応募しました。
審査会による審議を経て第４期目（１６年～２０年）の拠点運営を受託しました。

●神奈川区第７期地域づくり大学校
・神奈川区区政推進課が、認定 NPO 法人市民セクターよこはまの協働により毎年開催されている、第７期の地域づくり大学校５回（９月～３月）に、総合ファシリテーターとして参画しました。２０名の受講生と共に、学びと対話を深め、地域をもっと楽しく、暮らしやすくと考え動き出す過程に寄り添い、地域に繋げました。

●横浜市市民協働推進センターコーディネートによる、子ども未来プロジェクトに参画
・神奈川区横浜駅近くに事務所を持つ税理士さんの、地域貢献への熱い思いを真ん中にして、様々な分野にまたがるネットワークづくりを、センターと共にコーディネートしました。
対話をゆっくり深めることで、「場」を中心に各々の活動が繋がり、２年目に向けての土台となりました。
この活動の経緯は、センター発行「協働のまちづくりに向けてインスパイラル」という情報紙で紹介されました。https://kyodo-c.city.yokohama.lg.jp/topics/inspiral/

●親がめのホームページをリニューアル
・コロナ禍において、地域・かめっ子の開催状況についてより分かりやすく情報が得られるように表にて発信、併せて各かめっ子のニュース等も発信できる枠を作りました。

Ⅱ　神奈川区地域子育て支援拠点かなーちえ

コロナ禍における多様な事業展開

・開館時間内2部制、各回最大30組・サテライト25組（混雑状況を都度に表示）が、３月からは、開館時間が平常時（9時半～15時半)に戻りました。毎月定例の公園、プレイパーク（4か所）、外遊び応援タイム（4か所）出張事業を引き続き開催し、拠点を利用しない層への、情報提供や相談等を届けました。

オンライン事業の開催

・昨年度の補助金にてオンライン環境が整いました。それを受けて、人が集う場には来所しにくい人たちに向けて、子育てお話タイム・マタニティプログラム・はじめまして赤ちゃんプログラム・外遊び交流タイム・防災啓発タイム・ダブルケアプログラム・幼稚園紹介プログラム等、Zoom によるオンラインプログラムを開催しました。
こういった手法の実践を重ねることで、“拠点や支援の場には来所しにくい層”・地域へ向けての新たなアプローチの発掘に繋がりました。

かな―ちえサテライトの開所(入江・新子安地区)

・子育て世代人口の多い地区に、かな―ちえサテライトを開所しました。開所後、サテライト拠点として機能し、町の居場所として育まれるよう、地域の理解と支援をいただきながら運営に努めました。

就労型社会への移行期にこそ、地域へ繋げる

・就労型社会へと移行する中、拠点利用期間が短くなっている現況や、子育て初期に親として感じることが、自助・共助に繋がり、一瞬の出会いでも価値があれば、その人が変わっていくことを踏まえ、1回毎の来所がその人・子どもにとって、多様な人や価値観等にふれられるよう働きかけました。
コロナ禍において、家庭でのリモートワークが増えることで、父親の来所に繋がりました。程よい距離を保ちながらの声かけや、同じ子育て中の父親、母親、子ども同士へ繋ぐ等、この時期だからこその体験の場となるよう働きかけました。

ネットワークからの学びを事業に繋げる

・市民協働推進センターを運営する市民セクターよこはま・区政推進課の連携により、毎年開講されている「神奈川区地域づくり大学」に参画しました。より広い視野、視座を持って、地域づくり・子育て支援とは何かを学び合い、研鑽し、収獲した知見を発信する過程から、神奈川区の地域子育て支援を見つめ直し、より発展させる数々の機会を得ることができました。
・毎年変動する子育て支援施策を18区のネットワークの中で学び共有し、より広い視座から地域子育て支援事業の今後の方向性について検討を重ねました。

子育ち・子育て・地域支援の立場から参画した各種審議会等

・横浜市：　男女共同参画審議委員会、横浜市広報審議委員会
　　　　　横浜市バリアフリー検討協議会（羽沢横浜国大駅周辺地区部会）
・神奈川区：　かながわ支え愛プラン策定・推進会議、国際交流ラウンジ検討会

１）親子の居場所事業

●新規登録者数：１１５６人（東神奈川７７８人／サテライト３７８人）

年間利用者数：３８５６５人（東神奈川２３１５３人／サテライト１３３５４人／支援者２０５８人）

【父親利用】１７１０人／【祖父母利用】２１６人／【きょうだい】１８１４組／【プレママパパ】１４２人

●アウトリーチ総数：３５７４人（ひろばの利用者数には含まれない人数）

＜東神奈川＞

・4月のまん延防止等重点措置から始まり、緊急事態宣言、3月中旬まで、まん延防止等重点措置が繰り返された1年でした。年間を通して登録者がこの期間は減少しており、明けた10月は、0歳児が3倍に伸びました。年間で見ると、利用者数は、2拠点一緒ですが、コロナ禍前の数を上回ってきました。

・引き続き、新型コロナウィルス感染拡大予防対策を進めながら、「安心・安全な場」の継続に努めました。

・ひろばでは、空き箱、チラシ、新聞紙、段ボール等を出し、素材遊びを含め、親子を誘い、遊びを拡げました。

・感染状況に応じて、様々なプログラム（主に0歳児・マタニティ対象）をオンラインで開催しました。参加者は、その後の来所に繋がりました。

・産前のプログラムは、体験・参加型を行い、0歳児の父母たちとの交流タイムを頻繁に設けることで、産後の拠点利用動機に働きかけました。また、プログラム以外でも来所した人には、「沐浴や着替えの仕方」を伝授してもらうよう、先輩の親たちへ繋げ、「産後の暮らし」がイメージできる機会を、適宜設けました。

・日常的に利用する親子が増え、見守り、支え合う様子が見られました。また、リモートワークの父親が父子で利用することも増え、父親同士が会話する様子も見られるようになりました。利用頻度の多い父親は、「パパトーク」へも積極的に参加するようになってきました。

・土曜日は、復職した親子の利用が多く、お互いの近況報告や子どもの成長を共に喜ぶ姿が見られました。また、父子・家族・きょうだいの来所が多く、多様なひろばが日常的になっていました。

・学齢期になったきょうだい児が、乳幼児たちと、ごっこ遊びや絵本の読み聞かせをする姿が定着し、大人が距離を保って子どもを見守ることの大切さを、伝えてくれました。

・初来所のきっかけとなっている「親子ふれあい遊び・赤ちゃん編」が、毎回定員を超えるほどのプログラムになったことで、検証を行いました。母親たちのニーズが「交流タイム」にあることで、産後ヨガの時間にも当事者同士の「交流タイム」を増やしました。

・緊急事態宣言期間においても、テーマ別の「なかまトーク」は、相談機能の時間と捉え、実施しました（129回）。
当事者間の語り合い、支え合いを育むプログラム（療育おやこ・国際交流・双子三つ子・アラウンド40・20・ひとり親・父親）、中でも、「アラウンド20才のなかまトーク」は、自主開催から、定例のプログラムとして、定着しました。
シングル親トーク、療育おやこ＆うちの子気なるトークにおいては、先輩親を「メンター」として配置し、対話を深め、その効果を深く実感することになりました。

・拠点に来所しづらい地域においては、2か所の出張ひろば（沢渡三ッ沢地域ケアプラザ・羽沢長谷自治会館）を、各週1回開催しました。また、コロナ禍で、室内ひろばの来所を避けている親子のために、区内公園5か所・プレイパーク4か所で、出前事業を積極的に開催しました。

＜入江・新子安サテライト＞

・区内でも転出入家庭が多い地域に開設したサテライトひろば。地域の温かい支援の基、一戸建て環境や庭スペースを活用した、新たな居場所づくりを行いました。
日常的な屋外での遊びや、素材遊びを通じて、互いに見守り合う関係に繋げる等、常設の居場所としての在り方を、スタッフと利用者が共に考えながらの「場づくり」の1年となりました。

・初めてひろばを利用する親子が多く、対話が生まれる雰囲気や機会を重視しました。日常のひろばでの対話を積み重ねテーマ別トークや、人と人が繋がる事業を散りばめました。

・コロナ禍での孤立防止や安全対策として、オンライン事業や、新しいエリアへの出張外遊び事業に取り組みました。オンライン事業は、内容によりその意義や効果を考慮し、東神奈川とサテライトを中継で繋ぐ等、より効果的な実施を検討しました。

２）子育て相談事業

●ひろばや出前等の年間相談件数：6180人／10517件

●専門相談：【栄養士】28回／【臨床心理士】23回／【言語聴覚士】27回

＜東神奈川＞

・外に出ることを不安に思っている親、小学校に入っての困りごと等、電話相談が増えました。
また、スタッフが公園に出張することで、通りがかりの人や遊びに来ている人に声をかけ、何気ない会話を通して、不安や地域の状況を知ることに繋がりました。

・敷居の低い日常のひろばにおいて、何気なく交わされる話の中から、相談に繋げることができました。

・子育て中の親同士の話が、自身の力になるということを実感できるよう、プログラムをトーク形式で、度々行いました。スタッフがファシリテーターとして入ることで、当事者の生の声を聴き取り、ニーズを拾い、更に事業に繋げていく循環が生まれました。

・マタニティプログラムを定期的に開催することで、妊娠期の漠然とした不安を、事業を通して把握し、母子保健コーディネーターと共有しました。

＜入江・新子安サテライト＞

・東神奈川と同じ専門相談を開設当初から実施しました。相談機能の周知と、利用者の安心感に繋げることができました。
各専門相談員との1年の振り返りを行い、利用者とスタッフの関係性を築く中で、相談が出やすくなっていることが確認できました。

・産前産後の相談の入口として、地域の助産師と一緒に「助産師とみんなでトーク」や「マタニティプログラム」に取り組みました。子育てのスタートを支える場の1つとして、福祉保健センターと連携しながら事業を周知しました。

・新しいスタッフが多く、日々の振り返りや、スタッフ会議での研修に力を入れ、ひろばの声かけや雰囲気づくりから相談対応まで、日々チームで検討しました。

３）子育て・地域情報の収集と提供事業

●【子育て・地域情報の収集】行政（区福祉保健センター等）、施設（親と子のつどいの広場、地域ケアプラザ、保育所他、健康・国際・就職・各種相談機関）、地域（かめっ子、地域グループ）、当事者の活動、民間企業による地域貢献事業

●【情報の提供】通信（167か所）、ホームページ、インスタグラム

＜東神奈川＞

・子育て世代に利用者が多い、SNS（Instagram）で、積極的にひろばの様子や情報を投稿しました。
また、インスタグラムと共に、地域SNSアプリ「ピアッザ」の周知も、行いました。

・HPにて、すくすくかめっ子をはじめ、近隣の居場所の開閉状況、オンライン相談・オンライン交流タイム・相談タイム等の情報を引き続き伝えました。

・子育て家庭応援事業「ハマハグ」の申請を行い、地域活動グループの協力の基、新たに20件の協賛店舗を増やしました。

＜入江・新子安サテライト＞

・自治会町内会等の協力の基、地域の掲示板への掲示を行い、近隣店舗、マンションにもパンフレットの掲示を依頼、また、地元情報誌や情報サイトへ掲載され、新しい拠点オープンの周知が広がりました。

・新しいひろばにおいて、子育て支援やそれ以外の生活に関わる情報の拠点としての機能が発揮できるよう、情報をどう掲示するかについて検討を重ね、そのスペースを工夫しました。

・近隣地域を範囲に、みんなでつくるマップをひろばに掲示し、当事者から地域に密着した口コミ情報を吸い上げ、見える化する取り組みを行いました。

・子育て世代へのより効果的な情報発信のため、サテライト拠点としてSNS（Instagram）をスタート。様々な告知を行うと共に、ひろばの普段の様子を伝えました。また、感染状況により利用に変更や中止が生じる場合に、リアルタイム且つ、きめ細やかに変更を伝えられる手段となりました。

4）子育て支援者のネットワーク事業

●【地域で活動している個人・グループによるちえのわタイム】62回、【公園・プレイパークへの出前】17回、【共催事業】57回

＜東神奈川＞

・区内全域で開催しているすくすくかめっ子と、コロナ禍での開催状況の確認等丁寧に関わり、連携しました。
・ケアプラザや地区センターとの共催事業は、会場毎の感染状況の対策に応じて、地域のニーズに沿ったプログラムを検討し、開催しました。
・市域のネットワーク活動に参画することで、新たな分野の企業やNPO、団体と繋がる機会を得ました。
・地域課題を目的とするネットワーキンググループと共に、課題実現に向けて効果がある方法を探りました。
・HPで検索して問い合わせがあるほど、ニーズが高くなってきたおもちゃ病院は、時間内に修理が終わらないこともあり、サテライトでの開院を検討することになりました。
・民間企業の強みを活かし、市と共に共同開催のプログラムも実施しました。

＜入江・新子安サテライト＞

・東神奈川で培ったネットワークを基に、地域に根付くべく、新たなネットワークの在り方を模索しました。
・地域ケアプラザ2か所の共催事業を、サテライトで引き継ぎ、感染症対応をしながら継続。地域紹介を兼ねて、公園散歩を取り入れた交流等、地域を活用しながら新たな展開を行いました。
・新しいひろばとして、近隣の施設、子育て支援者会場、すくすくかめっ子会場と、日常的に情報交換し、状況把握と関係構築に努めました。サテライトという、より限定された地域を意識し、地域全体に働きかけることを大切にしました。
・「ちえのわタイム」に取り組み、サテライト地域で活動している個人・団体・企業と繋がることができました。

5）子育て支援に関わる人たちの人材育成・活動支援事業

●【ネットワーク交流会】2回／【ネットワーク学習会】7回

●【学生・職員の実習】延28人／【学生ボランティア】2人／【地域ボランティア】延137人

＜東神奈川＞

・地域から始まった「親子のふれあい体験授業」は、昨年度からグレードアップした動画を作成し、授業に活かしました。更に、「親子ふれあい授業」に参加した中学校家庭科教師から、申し出があり、ひろば利用者の協力を得て、動画を撮影し、動画を視聴した生徒からの感想を、ひろばで共有しました。
・父親たちの子育てトークでは、年間を通して、先輩父親と共に、参加者の希望を聞きながら、テーマを決め、当日のファシリテーターも務めてもらいました。
・オンライン子育ておはなしタイムを開催し（5回）、拠点という場には来所しにくい子育て中の親、地域の人に、広く届けました。
・スタッフは、オンラインを活用し、大小様々な研修に参加することができました。
・外遊び応援隊等、担い手向け講座を開催しました。その後、オンラインにて、外遊びの必要性を学ぶ機会も設けました。地域振興課の生涯学級と連携し、シニア層にも事業を繋げました。また、外遊び応援隊の活動に関心がある、子育て当事者により、令和4年度から入江町公園への実施に繋がりました。
・区と共に、すくすくかめっ子事業20周年として、事業の動画を作成し、配信しました。また、各地区のかめっ子が作成したかわら版を、区民ホールに掲示し、ファイルを全地区へ配布しました。更に、区作成の担い手向けアンケート調査に協力しました。

＜入江・新子安サテライト＞

・新しい拠点へ地域の人が足を運ぶ機会となるプログラムを実施し、多様な世代のボランティアの呼び込みに繋がりました。シニアボランティアポイント制度への加入もまた、シニア世代のひろばでのボランティア活動に繋がりました。コロナ禍で実習先が限られる学生ボランティアの受け入れについても検討し、実施しました。
・外遊び出前事業や外遊び体験事業を契機とし、利用者やボランティアに声をかけ、近隣公園での新たな「外遊び応援隊」の立ち上がりを促しました。担い手と共に学びタイムや話し合いを重ね、開催の準備を支えました。
・生涯学級や子育てグループ等の担い手からの活動相談に応じました。

6）子育てサポートシステム神奈川区支部事務局運営事業

●令和4年3月末日付会員数：【利用会員】657人／【両方会員】54人／【提供会員】121人

●事業：【入会説明会参加者】289人／【援助実績】3517件／【研修会】1回

・コロナ禍での生活が長期化し、産前産後の園送迎、きょうだい児の都合による預かり、ワクチン接種時の預かり等、親族間で調整ができなくなったとの相談が増え、依頼内容を丁寧に聞き取り、活動に繋げることができました。
コーディネートしていく中で、改めて、地域ぐるみで子育て支援を行うことの意義を感じた1年でした。

・感染拡大予防対策のため、集団の入会説明会を夕方に開催。子連れ希望の参加者には個別で対応することで、仕組みや主旨を丁寧に伝えることができました。また、来所を躊躇する人からの問い合わせもあることから、オンラインでの説明会に向けて、準備を進めることにしました。

・サテライトの開所により、より身近な場所での預かりを希望する人が増えました。

・本部移管に伴い、会員管理や更新処理の作業が本格化し、全区共通ルールの基、区支部内でも工夫をし、個人情報の取り扱いを更に意識した管理を行いました。

・オンライン登録を周知することで、年度更新処理をスムーズに行うことができました。（Web 更新者61％）

・提供会員募集の周知を積極的に行うことが難しい状況が続きました。今後も関係機関と連携を取り、効果的な周知活動を探っていきます。

7）利用者支援事業

●年間相談件数：273件

＜東神奈川＞

・コロナ感染症の緊急事態宣言、まん延防止等重点措置が繰り返される中、親族や知人のサポートが得られない、他の親子との交流がない等の困難が増え、そういった相談が多い1年でした。捉え方や価値観はそれぞれの家庭で多様であることを改めて認識し、自己決定を大切にした対応を行いました。外出を躊躇し、拠点等を利用しない家庭が多くいました。より身近な地域での支援が、益々重要性を増してきました。

・地域との共催事業は、コロナ禍の状況変化を注視し、実施方法の変更、内容の工夫等、臨機応変に対応を重ね、中止にすることなく状況に即して実施できました。

・オンラインを活用した事業が定着しました。拠点非利用者の参加、大人数に同時に情報が伝えられる等、オンラインの利点と可能性を感じました。一方で、双方向のやりとりや交流に課題も見えてきました。

・サテライトでも利用者支援事業がスタートし、どう連携して取り組むか、を検討しました。情報共有を密にし、それぞれの特性を活かしながら、両方で見守る家庭も出てきました。

・子育て世代包括支援センターの一翼として、妊娠中から子育て期の切れ目のない支援に取り組みました。妊娠期から地域に繋がることを念頭に、拠点スタッフと共に検討を重ね、地域の助産師を招き、マタニティ向けプログラムを実施しました。

＜入江・新子安サテライト＞

・10月からサテライトに横浜子育てパートナーが配置され、東神奈川の横浜子育てパートナーと連携しながら、事業の分担や、両方のひろばを利用する親子を見守りました。

・拠点に出向かない層へのアウトリーチとして、出張相談や出前事業を開始しました。コロナ禍での室内ひろばを避ける家庭等が、身近な公園で悩みを話せ、情報を得られる場となりました。

・子育て世代包括支援センター機能として、地域に根付いた産前産後事業に取り組みました。産後の暮らしが具体的にイメージできるようなプログラムや、ひろばを活用した支援をスタッフと共に検討した1年でした。地域の助産師と共に取り組むことで、市・区の両親教室や訪問型母子ケア事業と連動した支援にもなりました。

Ⅲ すくすくかめっ子事業

●訪問活動：６地区
●季刊紙発行：２回。20周年記念事業、かめっ子訪問、子育ておはなしタイム・子育て講演会の内容を掲載しました。

●動画作成　　７月８日 動画撮影 上三枚町・神西浦島丘・白幡の森プレイパーク地区
動画制作後、配信（ホームページ・区役所１階テレビ）
動画のQRコードを掲載したカードを作成し、全かめっ子会場・福祉保健センターへ配布しました。

●かわら版公開　かなーちえ、サテライト、出張ひろば（羽沢・沢渡）
親と子のつどいの広場（ほしのひろば・ママといっしょ！・しゅーくるーむ）に掲示
１１月１６日～１１月２６日 区民ホール掲示
かわら版ファイルを、全かめっ子会場へ配布しました。

●すくすくかめっ子全地区が、区長より感謝状を授与

Ⅳ 親と子のつどいの広場事業(しゅーくるーむ)

親子が気軽に集い、交流できる居場所を、身近な地域で利用できるよう取り組む。

テーマ「みんなで育ててみんなで育つ」

1）子育て親子の交流、つどいの場の提供

●新規登録者数：61組 ／ 年間利用者数：3952 人

・常連の利用者を中心として、初来所や1組だけで来ている親子にもお互いに声をかける雰囲気ができています。
利用者も一緒に広場のことを考えていけるような取り組みを続けることで、利用者自身が「心地よい広場づくり」を意識してくれるようになっていると感じます。

・利用者一人ひとりに合った関わり方をスタッフが感じ取り、工夫することで、全体として居心地の良い雰囲気づくりに努めました。

・間に消毒・清掃タイムを入れた2部制を継続し、それぞれの時間帯の中でライフスタイルに合わせた利用が見られました。 感染予防対策を実施していることを利用者が理解し、安心感を持って利用ができると好評でした。

・コロナ禍においても開催できるイベントを行い、それがきっかけとなり、利用する親子が増えました。

2）子育てに関する相談、援助の実施

・日頃からの関わりを通して、関係性を築き、相談しやすい雰囲気づくりを行いました。

・利用者の話にしっかりと耳を傾け、相談内容によっては区で行われている相談日や各行政サービス、保育所等の情報を伝え、利用者自身が選択できるような援助を行いました。

・利用者同士で相談・解決できるよう、スタッフがパイプ役となって繋げながら、利用者同士で解決するヒントとなるような文献や情報を提示しました。

・広場で起きた様々な事例に関して、スタッフ間で共有・意見交換をすることで、一人ひとりが状況に対応できるようなスキルを身につけることに繋がりました。

・3か月に1回、横浜子育てパートナーが来訪しました。(相談や情報発信)

3）地域の子育て関連情報の提供

・地域や関連施設、地域子育て支援拠点と連携し、情報収集に努め、利用者が手に取りやすいように掲示したり、各々のニーズに応じてスタッフから手渡す等、情報提供をしました。

・地域の子育て支援ネットワークと連携を取り、情報発信を図りました。

・近隣の福祉法人施設・地域コーディネーターと連携を取り、共催イベントの実施や情報提供等、交流を図りながら情報発信に協力してもらいました。

4）子育て及び子育て支援に関する講習の実施

＊かなちく子育て応援タイム1回（0歳親子向け体操イベント）

＊幼稚園ウィーク（かなちく子育て応援タイムの会場を、菅田地区センターからしゅーくるーむに移動して実施）

＊今年はお外で！ハロウィンイベント（近隣の老人ホームとの共催イベント）

＊ハロウィンウィーク・クリスマスウィークとして、自由参加の工作イベントを実施

＊足形アート3回　＊ストレッチタイム 月2回　＊3か月に1回横浜子育てパートナー相談日

＊おはなし会（読み聞かせボランティアグループ）　＊お誕生会　＊お花見イベント

・今年度は、感染症対策のため大規模なイベントはほとんど開催できませんでした。来年度も状況を見ながら、利用者にとって、安心・安全なイベント企画をし、利用者が積極的に広場に関われるような環境づくりをしていきます。

5）地域の子育て関係者、関係機関・団体や行政機関等との連携

＊福祉保健センター地区担当保健師　＊保育・教育コンシェルジュ

＊地区センター・地域ケアプラザ・地域子育て支援拠点との共催企画の実施

＊スタッフが地域の赤ちゃん学級（月1回）・外遊び応援隊（月1回）・子育て支援拠点のスタッフを兼任

＊地域の子育て支援ネットワークへの参加

Ⅴ　親と子のつどいの広場事業(ほしのひろば)

誰でも、どんな時でも気軽に立ち寄り、のんびり過ごし、他の親子と交流できるよう取り組む。

テーマ「ほっとできる居場所☆ほしのひろば」

１）子育て親子の交流、つどいの場の提供

●新規登録者数：１１８組　／　年間利用者数：３９０７人

・近隣利用者の多い、顔の見える関係の安心感を大切に、大人も子どもも、人と人のふれあい・語り合いの中で育み合えるよう、ほっとできるようなひろばの空気感を日々大切にしました。

・昨年度に続き「あかちゃんタイム」、今年度から「１歳児さんあつまれ」「大きい子あつまれ」と題したプログラムを設けました。人数制限のある中でも、同じくらいの子どもを持つ利用者同士が知り合うきっかけをつくることができました。

・2020年２月にスタートした一時預かり事業は、319組（月平均26.5組）の利用がありました。他の一時預かりが中止する中でも、ひろばの預かりは継続していたため、利用者からの問い合わせも多くありました。

・地域の中にある「預かり」を意識し、一時預かり事業が“サービス”だけにならないよう、利用者にも声をかけています。スタッフが責任を持って「預かり」をするのはもちろんですが、みんなで見守り合うスタイルが定着しました。

２）子育てに関する相談、援助の実施

・3か月に1度、横浜子育てパートナーの訪問日を設けることにより、利用者が直接、保育園・幼稚園の情報や地域情報等を聞く機会になりました。

・YMCA東かながわ保育園の保育士の協力を得て、毎月先生と話をする時間を設けました。離乳食や生活リズムの相談等をしている様子が伺えました。ひろばのスタッフ以外の専門家と話のできる貴重な時間になっています。

３）地域の子育て関連情報の提供

・一時預かり事業を始めてから、預かりの問合せが多くなりました。ひろば以外の預かりの情報を提供できるよう、掲示にも工夫をしました。

・転居してコットンハーバー・ポートサイド地区に住む親子が多くいるため、近隣のクリニックの情報の掲示も始めました。

４）子育て及び子育て支援に関する講習の実施

・YMCA東神奈川保育園の協力で、給食のサンプルを見ながら管理栄養士の先生の説明を聞き、悩みを相談する「ごはんのお話会」を11月と12月に2回開催しました。当日は0歳児クラスの様子を動画で見ることができました。コロナ禍以降ひろばでの食事を休止しているため、他の子どもの食べる様子を初めて見ることができたと、好評でした。

５）地域の子育て関係者、関係機関・団体や行政機関等との連携

・コットンハーバー地区すくすく子がめ隊合同「ミニミニ運動会」「クリスマス会」

・福祉保健センター地区担当保健師・民生委員児童委員・主任児童委員・地域ケアプラザ・区民活動支援センター・すくすく子がめ隊他「地域連携ミーティング」

・きらふわ遊びの会「きらきらプレイパーク＠星野町公園」年6回参加